

# ランチョン交流集会の座長をつとめて

松井 希代子

(金沢大学大学院医学系研究科)

第1回看護実践学会学術集会ということで、これまでの石川看護研究会にはない交流集會を企画しました。参加者がどのくらい集まるのか、口演と重ならないほうがいいのかなどの案が挙がり、会長の発案でランチョン交流集會という面白い企画になりました。用意した整理券は50枚でしたが、予想を超える参加がありました。

交流集會のテーマは「災害看護」です。この背景として、平成19年3月25日の能登半島地震があります。この地震が起こるまで、石川県は日本でも災害の少ない県といわれており、災害看護に対して聞いてはいても関心が薄い人が多かったのではないかと考えました。能登半島地震によって災害は身近なものとなり、看護者としてどのようなことができるのか考えた方も多かったと思います。

今回の交流集會の目的は、災害看護に関心を持ち災害看護に携わった方からの体験談を聞いて災害看護を身近なものにしていただきたい、体験談を語っていただきたいということでした。

座長の私のほうからは、近い親戚が被災したことによる体験談と叔父の生活の様子から感じたことを述べさせていただき、金沢大学大学院医学系研究科 稲垣美智子先生からは「地震災害を例に」ということで兵庫県立大学の21世紀COEプログラムから活動を通しての報告と共通課題、災害看護活動の必要性、対象別のニーズを一般的知識としてご紹介いただきました。石川県立看護大学 林一美先生からは石川県立看護大学の実際の対応をご紹介いただきました。

会場からは、実際に救護活動を行なわれた看護師の方々活発な発言を頂きました。

現地の保健師や看護師は自分達も被災しながら住民の支援を行い、本当に良くがんばって対応していた、しかし、ニュースなどでの行政の対応を批判されると自分達が非難されているかのような

つらさがあったこと。ボランティアの方々のありがたい支援ではあるが、統括できる人の存在が必要であり、人の少ない町であったところに見知らぬ多くの人が入り出すことで、逆に住民が今までにない用心を必要とすること。先に被災した新潟や神戸などの方々の経験がやはり助かったことなど、また、現地の人の食料は現地の人のものであると、準備万端にして一切負担をかけないように対応するなど、少しの気遣いが支えあいになっていると感じました。地震の規模が大きかったのに死者が少なかったのは、近日にお祭りがあり、その踊りの練習のために住民が練習に参加しており、家の中にいる人が少なかったことや町会長さんが住民の誰が寝たきりで動けないのかなどを把握しているなど、今は薄くなりがち住民の連携が取れていることが大きかったことが挙げられたようでした。

住民の方は、昼間は自分達の家の片付けに行き、夕方になると避難所に帰ってこられるそうで、その間、看護師の方は何もすることがなくて何かしたい、何か助けになればと思ってきたのにこれでいいのかと考えていたら、住民の方に「看護師さんがここに（避難所に）いてくださると思うと安心して私たちはいられます。」という言葉聞いて、看護師の免許を持っているだけで人に安心してもらえると、看護職の免許というものをとても重く責任のかかったものとして受け止めた話が出て、私自身が感銘を受けました。

私自身は災害看護をこれから学ぶ立場でしたので、皆様の意見を頂き災害看護を立ち止まって考える機会にさせていただきました。ご発言いただきました皆様、ありがとうございました。参加いただいた皆様にとっても災害看護を考える機会になれば幸いです。